詩3ッ

露古

白い朝

目を閉じている
わたしは朝にいるから
ねじれた指をゆっくり起こしてやる
きりり、きりり、
この耳鳴りはよくない
白い象がわたしを覆っている
象の歯を見たことがあるかい
誰かが訊ねた

知っている
わたしは子を産むのだ

猫と雨

猫はもう死にそうだった
落ちた舌が笑う
なあにほんの気まぐれよ
雨が落ちて
(落ちて)
ほんの気まぐれに

透明な額

紫の陰りに透明な額(ひたい)が浮かんでいる
一音も漏らすまいと
死人(しびと)のそれが至上の歌と
信じたから